



世  
わ  
た  
り  
の  
船

緒言

此ノ法語ハ故香山院龍温講師嘉永庚戌歲十二月除夜ノ法語  
ニシテ當時西慶寺靈俊寮司記シテ篋底ニ藏ス其子靈秀得業  
近頃是ヲ得テ以テ予ニ示ス予披テ是ヲ讀ムニ其言卑近ニシ  
テ其意甚深懇懃ニ人心ノ方向ヲ示シ丁寧ニ同朋ノ素行ヲ告  
ク實ニ處世ノ船筏ナリ依テ講話會委員諸君ニ諮リ印刷ニ付  
シ會員諸君ニ頒ツ諸君願クハ自心ノ方向ヲ定メ以テ素行ヲ  
正フシ安樂ニ此ノ世ニ處セラレント伏テ希フ焉

發行者 謹白

世わたりりの船

寸も長く丈も短しと云へる事ありて。一寸のものでも二分や三分のものに比ぶれば長と云はれ。一尺のものでも五尺六尺のものに比ぶれば短ひと云はる其の比べやうによりて長ひと云名もつゝ短ひと云ふ名も付く。今日佛法を信せざるものは。我身の行末を思はず罪も報も恐れず。我儘氣儘に生涯を送る者に比ぶれば。後生を心につけて聞法に骨を折り。信の上へには稱名怠らす此世の掟て迄も守らねばならぬと思へば。つらき勤めのやうなれども。自力聖道門の難行に比ぶれば物の數にもあらず。増して如來大悲の御恩の廣大なるに比ぶれば。塵りほごにも當らざるなり。然るに此度淨土へ參る我身と云ふことを忘れて。空く地獄へ落る者に見比へて。後生を願ふは苦きよふに思ふは大なる心得違ひなり。如此こゝろの振向の違ふより。萬づにつけて一步千里の誤りとなる故に。今五つの思ひ比へを辨し。更に五つの心得を辨して十ヶ條とす。

一には壽と天との思ひ比へ

- 一には貧と福との思ひ比へ
  - 三には貴と賤との思ひ比へ
  - 四には苦と樂との思ひ比へ
  - 五には損と得との思ひ比へ
- 次に五つの心得とは

- 一には災に逢ふての心得
- 二には病を受けての心得
- 三には耻を知るの心得
- 四には足る事を知るの心得
- 五には忍忍の心得

右の十ヶ條は我心のふりむけやふに依て心に安樂をうるの法なり

一には壽と夭との思ひ比へとは壽命の長短は力の及ばざる者にて 聖躬萬歳と日夜祈り

奉る天子様にも長短はねはします又着兼ね食兼ねて許多の人に死ねかしと思はれて長いきして居るものもある此れ生れ始めし時にいつ何時死ぬると云ふことか定りてあるゆへなり夫れは付ては人生五十年と云ふことありて人の一生のよひ所は先づ五十年までなり其後は世間に使かはれ子孫に使はれて其上身体は晝夜衰へ行くはかりにてさして樂みどては無きものなり去り乍ら折角人間に生れて三歳五歳で死ぬるものあり十五や廿で死ぬるもある心無き苦み時は面白き此世とのみ思ひしに色々の事にも逢ふて彼是五十前後までも活き長からへて何事もあしなき浮世なり後生ころは一大事なりと心の付くまての壽命を持ちたるは實に命は法の寶らなり唯た徒らに長命すれば罪の借錢の延る斗りなれば敢て羨むべきにあらずいつまで居ても同じ浮世にてたゞ一年まさらり悲事事を耳に聞く斗りなり去れば此の佛法をたにも聞得たらは人間に生れ壽命をもちし甲斐はありしものをたどひ何時病を受けてもよしや死てもさのみ残り多き娑婆にあらずと思へは誠に心安樂なり

二に貧と福との思ひ比へと云ふは凡る人の貧福と云ふも約る所は天の命にして貧きにも限りなきものなり一日働きて一日暮し今日食して明日食ふものなきも有り又甚しきは人の交りもならず屋根の下にもゑねらぬ者もある夫らに思ひ比ふれば今日寒からずひだるからず命をつなきて佛法を聴聞するは大なる福分なりまして心やすく世を渡り家内眷屬相和して法義をも相續し未來は淨土に生るへき身となりなは彌々大福長者なり現當二世更に不足のなき身の上と思へは心安樂なり

三に貴と賤との思ひとは貴賤上下其品のかはること知りて下とては上を敬ふへく必ず羨む可きにあらず一段二段の等級さへも登れば登るはと世間も狭く身も窮屈なるものなり又賤きものは尊き人を見て樂にあつと思へとも大なる間違なり別して佛法聴聞の身は必ず尊貴を羨むへからず既に御經の中に豪貴にして道を學ぶこと難しと説き玉ひて苟も家を出るには家來も召連れ乗物にも乗らねはならぬと云ふ身分ならば心の儘に法の赴るにも到り難し去ればとて同行相交りて法話の席にも出兼ねる身ならば何程か悲

き事ならんに今日佛法を聞ふと思へは輕くと家を踏み出し心の儘に聞かると身となりたるは大なる幸なりと思へは我が生れたる身分の儘にて心安樂なり  
四に苦と樂との思ひ比へと云は人の食物には甘さをすくものもあり辛さをすくものもあれども獨りとして樂を嫌ひ苦を好むものはなきものなり然るに此の苦樂と云ふも其体の定らざるものにして土偶竹馬は小兒の樂みなり四海泰平は天皇の樂みなり後生知らぬものよりは定めて佛法は難義にして陰氣な思まはしきものと思ふへし又佛法を信する身からは此の法味を知らざるものゝ淺間しさ如何なる歴々ても哀れに臺なく思はるゝ實に此の佛法の中には餘る目より見へぬ限り無き樂みのあるものなり去り乍ら凡夫の身としては先つこの佛法に入り後生を願ふは唯た苦敷ことと思はるゝよしや苦しきにもせも願はねはならぬなり世の中には地獄の因を作るさへも皆な苦しく作るなり夫れに思ひ比ふれば僅か斗りの苦みにて未來は永劫極樂に生るゝ心の振向き一つにて苦しきに似て苦しきにあらず豈に樂きにあらずやとの給ふ苦しき儘か又樂みと轉し變るなり又信の上にも煩

惱具足の凡夫なれば生れつきの煩惱の方よりは矢張り苦くも思はるゝされはこそ一世の  
 勤苦とも説されき玉ふことなれとも思ひ反せば苦しき儘にて心安樂なり  
 五に損と得との思ひとはすへて損得に心を動かさぬものはなし故に菩薩てさへも利と衰  
 とをばあらし風に譬へ給ふまして今頃の人は一文でも損することは嫌ひ聊かても得をど  
 ることを喜ふなり然るに此の世の損は假令何なる損をしても年を経れば取り販しもな  
 るなり又得は何なる得をしても死ねば捨て行かぬはならぬなり今真宗の御法りに逢ひ  
 乍ら又空く惡道に沈むほどな大なる損はなひ更に自力の苦勞なしに極樂に生るゝはどな  
 大なる得はなし一度淨土に生るゝなり二度惡趣に立返る氣つかへなく死ぬる氣つかへも  
 なく病の起る氣つかへもなく永く貧苦に離れて七寶の臺黄金の大地に住する身となるな  
 りかゝる不思議の法に遇ひたる實に金のつるに取付たるたるか如く無量永劫身に付く  
 得をえたりと思へは此世一旦の損得にはさのみ心の動ぬやうになるかゆへに自ら心安樂  
 なり

偕て次に五の心得を辨するに  
 一に災に逢ふての心得は人の災には自ら招く災あり天の爲せる災あり何れにもせよ念佛  
 の行者には諸天善神の御守りあり除かるへさ丈は皆な免れさせて下たさるなり其の上  
 も災に遇ふは轉重輕受とて重さを轉して輕く受けさせて下さるゝなり是れ決定業のなす  
 所は聖者てさへものかれられぬものなり故に災に逢はゞ彌々謹みて其の災を縁にして念  
 佛一行をはけむ時は災も轉し代りて幸となるなり本より災と福ひとは互に離れざるもの  
 にして災あれはこそ又幸ひありと思へは假令に不慮の災に偶ふても心安樂なり  
 二に病を受けての心得とは凡る此身は地水火風のかりものなれば四百四病か此身一つに  
 具はりてあれは此方の勝手は悪くとも何時何かなる病か起るやら知れぬ若し名の付た病  
 かふと身に起りたらはこそ死の縁なれと先づ覺悟せねはならず然るに天台大師は病  
 も觀念の相手なりとの玉ひ又古徳は病こそ善智識なりと喜はれたり今までうかくとし  
 て居りしものか病を縁にして彌々誠の佛法を聞きつけたらは實に善智識なり我は病人

なりと思ひて萬づ謹みて養生を第一として其の上は我が宿縁のなす所とあきらむるときは假令病か起りても心安樂なり。

三に耻を知るの心得とは人たるものは世間につけ佛法につけ耻を知るをよしとす。然るに佛法の上にては。すべて教への如く行ふこと能はざるを耻とす。然るを人多く取違へて。我が誤りを打出して分らぬことを尋ね聞くを耻と思へり。これ心得違なり。去ればわらゆる耻の中には。此度本との惡道へ立返りて。三界六道已が業の爲めに引廻されるほどの耻はなし。此世の耻は假令何なる耻ちも。命終れば跡とかたもなし。又耻を雪ぐと云ふことも出来る。然るに地獄に落ちて獄卒に耻ぢしめられ。汝ぢは愚人なりと云はれ。又餓鬼に生れて水一口さへも飲むこと能はず。又畜生となりて重荷を負ひ賤者に打叩かれて叱らるゝ斗りにて。終に牛馬のはめられたことはなし。是れに過たる大なる耻はなし。思へば商人か算術も知らず。婦人か物の縫ふすべも知らぬならば。我が當り前のことゆへ耻なるべし。迷の凡夫か証の道を知らぬは知らぬ善のことゆへに耻にあら

すわからずばわかる所まで能く聞くべし。よし耻かしかるとも耻かきても得とれと云ふこともあれば。未來の耻にかけ比べて。耻しき心中を打出して御なれしに預るべし。左様に心得れば無我になり。法が聞かるゝゆへに心安樂なり。四に足ることを知るの心得とは是れは世間の上へにても常に教ゆることなれども別して佛涅槃の砌りに。いと懇に示し玉ひたることにて。足ることを知る人は。地上に臥すと雖も猶安樂なり。足ることを知らざるものは。天堂に居すと雖も。亦心に叶はずとの玉ふ。實に足ることを知らざれば。二階三階の上。蒲團をしひて居ても。段々に好みか出る。又是れで足るとだに思へば。土の上へに卓敷ひて休みても。氣樂なりとの玉ふことなり。佛説まどふべきに非ず。此の足ることを知ると云ふか。實に心安樂をうるの法なり。五に忍恕の心得とは。恕の字は思ひやると云意の文字なり。思ひやると云ふは。我身勝我身勝手を離れて。向ふの身になりて思ひはかることなり。凡る人の心は。常にくわちどふものにて。若し者と年寄と。達者な者と病人と。男と女と。皆な思わくが違ふなり。

智愚善惡の違ふことは云ふ迄もなきことなり然るを思ひやると云ふは我かいたきこと  
は人もいたきものなれば。向ふの心になり。向ふの道理をつけて。思ひやることを恕の  
道と云ふ。此の中に仁義禮智あらゆる人間の道は籠るゆへに一を以て貫くと云ふ肝要  
なる道なり。此の思ひやる心より。堪忍の心も起るなり。この娑婆をもと堪忍土と云へ  
ば。乍忍上は天子様より。下は乞食非人迄。皆な心に叶はぬことをこらへて行かねばな  
らぬと云ふが此の世の有様なり。悪趣の衆生が苦みを受けて業を果すも堪忍なり。人と  
生れて其の道を守りつとむるも堪忍なり。我が腹の立つを堪ゆるが常に教ゆる忍の道な  
り假令ひ身の節々を切らるゝとも。腹立ることのならぬが佛道の修行なり。夫れに思ひ  
比べて。常に此の恕忍の道に心にかけるときは。生涯心安樂なりと心得べし。右十ヶ條  
右十ヶ條。何にこれとあつてもなく。筆に任せて書きつけぬ。若し此れを聞て聊かも  
心に安樂を得ぬ人あらば。唯こゝろよく南無阿彌陀佛と稱へ給ふべし。

嘉永三年庚戌のとし

釋龍温誌



019226-000-8

特17-340

世わたりの船

龍温/著

[出版事項不明]

ABF-2818

